
NPO法日本海洋深層水協会メールマガジン 第78号 (2015年1月30日)

NPO法人日本海洋深層水協会 メールマガ編集チーム

当協会では、海洋深層水利用の最新動向や、各地のイベント、製品開発などの話題を、会員および一般の皆様へ、より積極的にお知らせするために、メールマガジンを発行しています。

どなたでもご利用いただけますので、配信をご希望の方は、当協会HPの“メールマガジンの申込み”

http://www.npojadowa.net/DWScript/DWInfo_MailMgzn.htm

からお申し込みください。

なお、昨年10月から非会員の方には3か月に1回の配信となっています。

会員向けには、同時に海洋深層水関連ニュースも配信しています。

読者の皆様で、メルマガやHPを通じて情報や話題を提供したいと思われる方は、メールで npojadowa@npojadowa.net まで、ご連絡ください。

目次 <会員投稿記事>

見かけなくなったものをレベル分けして遊ぶ

その1 ー都会の空から星が消えてー

今年最初のメルマガでは会員の方から寄せられた投稿記事をお送りします。

中身が深い長編なので、次回と合わせて二回でご紹介します。

見かけなくなったものをレベル分けして遊ぶ

その1 ー都会の空から星が消えてー

星空を眺めていると、いろいろなことが頭に浮かんでくる。

今見ている星々のきらめきは、何十万、何億年もかけてこの地に届いているのか……。

宇宙人がいるなら会ってみたい……。

本当にビッグバンで宇宙は生まれたのか……。等々、思いは尽きない。

ここは、千葉県は金谷にある山小屋。周りには数件の農家があるだけで、そこからの光は木々が遮り、昔ながらの暗闇が広がる。

都会では、光害により見えなくなった星々がこの地ではあたりまえに存在している。

時折、流れ星がスッと現れては願い事をつぶやくまもなく消えていく。

冬は、空が澄み、この上ない輝きで星達がまたたき、冷気に身をさらしていても、美しい夜空を眺めているだけで時は過ぎてしまう。

わずかな時間ではあるが、山の稜線の黒いシルエットの上で、南側の星はだいが動いたことがわかる。古人は、この星々、そして月や太陽の動きを日々追うことで、時間の概念や、一年の周期性を感じとり、暦をつくり、狩猟や農業などに活かしてきたのだということがあらためて感じられる。時計の針の動きに縛られる時間でない、本物の時間がここにはある。

見えなくなっても、消えたのではなく、都会ではあふれる光のせいで見えなくなったもの、それが星空。場所を変えれば見ることができる。これを、見かけなくなったものの内、レベル1としてみよう。

横浜の我が家の小さな庭では、実のなる木々に、ウグイス、オナガ、ヒヨドリなどが季節ごとに現れては、キンカン、イチゴ、ザクロ、柿など、色づいた実をつついている姿が楽しめる。なかでも、早春は、親子のメジロが梅の花をついばみに訪れ、数羽の幼鳥のなれない仕草と目の愛くるしさは格別なものがある。しかしながら、この庭でスズメの姿を見かけなくなって久しい。

以前であれば、スズメのチュンチュンという歌合戦で朝を迎えたものだが、今は甲高いカラスの鳴き声ばかりが朝の町にこだまする。

可愛いスズメたちはどこに行ってしまったのだろうか。

スズメは、あえて人の傍で生活することで外敵であるカラスや猛禽類に襲われることのない生活様式を獲得してきた。スズメほど人間に親しい鳥はいないのに何故、急に姿が見えなくなってしまったのだろうか。

農家にとってスズメは、実った稲を食べてしまう害鳥であると同時に、稲を根こそぎ食い尽くすバッタや、稲を枯らす虫の幼虫を食べ、退治してくれる益鳥でもあるという。

トータルで観ると、益鳥の割合が大きいといえるようだ。

我が家の庭から姿を消したが、家の近くの公園の陽だまりではたまに見かけることもある。確かに、まだ、郊外や農村にはスズメがいた。

しかし、その数は圧倒的に少なくなっている。

私が学生であった1970年代は、秋ともなれば、稲の実った田圃では、スズメおどしの大砲のような装置が鳴り響くと同時に、鳥よけの網の上を何十、何百というスズメの大群が一斉に飛び立つ光景が見られたものである。これだけのスズメが米を食べていたら農家の人も我々も、そのおこぼれを頂戴しているみたいだと当時思ったくらいである。

スズメを見かけなくなった原因をネットで探ると、解明はされていないものの、どうやら最近の住宅構造がスズメのすみかにそぐわないように変わってきているのが一因かとの記述があり、少し納得した感がある。確かに我が家も建て替えて10年以上になるが、見かけなくなった時期と一致するのである。スズメは場所を変えて生活しているのだろうか。

ある調査によると、数も五分の一ぐらいになっているとあった。

住宅の構造の変化で見かけなくなった鳥は、ツバメもそうであろう。

これら、人間の生活に依存していた鳥たちが、場所を変えて生活して生きていけるかは疑問である。たまにスズメを見かけても、安堵感よりも、やがては絶滅危惧種の仲間入りをしてしまうかもしれないという沈んだ気持ちが頭をもたげる。

見えなくなっても、場所を移せばまだ見かけることができるもの、ただし、数は確実に減ってきているもの、それがスズメ。これを、見かけなくなったものの内、レベル2としてみよう。

レベル3は、ミツバチにすることにした。

レベル3の定義は、レベル2の激滅していることに加えて、「大量の個体が一夜にして失踪するという現象が各地で報告されている」と決めた。

最近、スズメと同様、我が家の庭からもすっかり姿を消したミツバチは気になっていた。いつだったか、ミツバチの激滅、それも、コロニーが一夜にして消失し、元の巣の周りにミツバチの死骸が見つからないという不思議な現象が世界中で起こっているとの報道があった。

この機会に、wikipediaで調べてみると、この現象の解明のために「蜂群崩壊症候群(CCD)」の名称を用いて、突発的なミツバチ失踪現象の原因究明が試みられたものの未だに解明に至らずという状況が記されていた。

私たちの食材となる多くの植物は、花を咲かせ実をつけるときには、受粉に昆虫の手助けが必要なものが多い。風に花粉を運んでもらう種類もあるが、花から花へと蜜を求め飛び回る昆虫に運んでもらう方が確実な受粉が可能である。何しろ風は気まぐれだから、いつ吹くか、向きはどうかも当てにできない。花はそれを知っているので、蜜を作り、きれいな色の信号で花弁のありかを示して、虫をおびき寄せるように進化してきた。そのため、多くの農家がビニールハウスなどに、購入したミツバチを放し受粉をミツバチ頼りにして野菜や果樹の生産性を上げている。生産者が、手で花の一つ一つに人工授粉をしていたらそれこそ手間賃が上乗せされて農産物の値段はとんでもないものになるに違いない。

ミツバチはまさに、最低賃金で確実に仕事をこなす花粉宅急便の役割を果たしているのだ。これらがいなくなれば、生産不能に陥る農産物は幾種類にもあがるであろう。

「蜂群崩壊症候群(CCD)」のような事態が進行すれば、食糧危機により人類生存の可否まで問われる事態になるだろう。この現象の原因として、「ウイルス・ダニ寄生説」、「農薬・殺虫剤説」、「電磁波説」、「ストレス説」、「異常気象説」その他、いろいろなものが唱えられているが、これらが複合されたものなのか、あるいは、これらとは全く異なる因子があるのか解明はされていないという。

ただ、2013年の5月、EU(ヨーロッパ連合)が、ネオニコチノイド系農薬という農薬の使用規制に踏み切った。この農薬は、僅かな量でも効果が高く、持続するというので、「夢の農薬」として、近年、世界中で広く普及しているという。

なぜ、EUが、「蜂群崩壊症候群(CCD)」の原因とは完全には断定されていない農薬の規制に踏み切ったかは、「NHKクローズアップ現代 2013年9月12日(木)放送」分に紹介されている。(参考：http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail02_3401_all.html)

非常に面白いので、興味を持たれた方にはアクセスをお勧めしたい。

その農薬は、日本でも、作物の害虫であるカメムシの防除に特に威力を発揮し、散布回数も少なく済むとして、未だに規制されることもなく、多くの農家で使われ続けているという。

それにしても、ミツバチがいなくなっているという真の原因は、本当のところ何なのかとても気になるし、EUでは規制されているその農薬の使用を、日本でも控えて欲しいと強く思う。早期の原因究明と対策が望まれる。

今回、身の回りから見かけなくなったものをレベル分けしてみるという遊びを独断的な定義付けで試みましたが、これにより、自分の中にあった「憂い」を呼び覚ます結果となりました。

(円周率 π)

この続きは次号に……